

黙示録20章7-15節 「火の池への裁き」

1A 最後の感わし 7-10

1B 取り囲まれる都 7-9

2B 地獄に墮ちる悪魔 10

2A 大きな御座 11-15

1B 行ないの書 11-13

2B 第二の死 14-15

本文

黙示録 20 章を開いてください。私たちは前回、20 章の前半を学びました。千年間のキリストの地上における統治について見ていきました。私たちは、神の救いのご計画を知る時に、今の時代がいつまでも続くのではないということを知るべきでしょう。千年期においての特徴は、19 章 15 節にあるように、イエス・キリストが鉄の杖をもって諸国を牧する時代です。悪を行なう者、主の命令に従わない者たちがいるならば、力をもってそれを罰する時代であり、ゆえに悪が広がることは一切ありません。

それに対して、今は、恵みの時代と良いでしょうか？いや、神の恵みはとこしえからとこしえまで続くので、今だけが恵みの時代と言ったら語弊がありますが、けれども、神の恵みがかもとも顕著に現れている時代と言ってよいと思います。イエス様が、「天の父は、悪い人にも良い人にも、太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。(マタイ 5:45)」と言われたように、主が忍耐強く待っておられる時であります。パウロもローマ書で、「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。(4 節)」神の慈愛と忍耐と寛容があつて、それで人々が悔い改めに導こうとしておられます。ですから、私たちも早まった判断を控え、主が聖霊によって人々を変えてくださるように祈る必要がありますね。今、終わりの兆候が強く、あまりにも悪がはびこり、それでどうしても、人々を裁いてしまう傾向を、真面目なクリスチャンは持ってしまいます。けれども、それももう一の罫で、私たちは、畑にある毒麦を刈り取つて、他の良い麦も刈り取つてしまうことがないように注意しないとイケません(マタイ 13:29)。隠れていることは、良いことであれ、悪いことであれ、必ず明らかにされますから(1テモテ 5:24-25 など)、明らかにされたことに基ついて、慎み深く裁くべきであり、早まった裁きをしてはイケません。パウロも、ピリピ書で教会の不一致の問題が出た時に、「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。(4:5)」と言いました。私たちは恵みの日にふさわしく、悪に対して妥協を決してしてはならないですが、主を畏れかしこみつつ、人々に忍耐と寛容の心を抱くべきです。

1A 最後の感わし 7-10

そこで千年間における、キリストの統治についてですが、ここでも、すべての悪が滅ぼされたのではない、「鉄の杖で牧する」とあるのですから、悪がなければ鉄の杖を用いる必要はなく、悪が抑えられていても滅ぼされていないことが一つの特徴と言えます。それがはっきり分かるのは、悪魔が底知れぬ所で、鎖でつながれているということです。鎖につながれ、底知れぬ所が閉じられているのですから、悪は完全に抑えられています。けれども、悪がないことを意味していません。

思い出していただきたいのですが、千年期の支配において、諸国の王たちがメギドの山、ハルマゲドンに集結して、それから神とキリストに反抗して戦うけれども、王の王、主の主であられるイエス様が、口から出る鋭い剣によって彼らを滅ぼされた後に、この王国を立てられるのです。そこにおいて、世界中の国々の民全てが死に絶えるのではないのです。大患難の災禍があれだけ大きいにも関わらず、それでも地球上から人々が消え去っているのではないのです。そうした諸国の民が、王座に着いておられるイエス様のところに集められます。「マタイ 25:31-33 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。」そして、右にいる者たち、羊である者たちには、「世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」と言われます。それは、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」裸の人に着る物あげ、病氣や牢にいる人々を訪問しましたが、わたしの兄弟たちとイエス様が言われていますから、患難時代にイエス様を証していた者たち、あるいは肉の兄弟であるユダヤ人である可能性もあります。そういった者たちに良くしてあげた者たちが、御国に入る祝福にあずかると主は定めておられました。

ですから私たちは、霊の兄弟たちであるキリスト者、またイエス様の肉の兄弟であるユダヤ人、また一般的に人々に目が向けられていない人々に、王なるイエス様の心が向けられているということを知る必要がありますね。いずれにしても、主は明確にイエスを主と認めていないにしても、それでも主と認めている人々に寄り添い、獣の国の中で自らの命の危険を冒しても助けていた人々を、御国の中に招いてくださるのです。アハブの時代、アハブの家臣でオバデヤという人が、場アりに身をかがめていなかった主の預言者を匿っていましたが(1列王 18:1-15)、そういう人たちなのでしょう。

そして、既にイエス様を主として告白している者たちについては、第一の復活にあずかり、キリストと共に統治することについては前回学びました。20章4節を再びみましょう、「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千

年の間王となった。「多くの座」とは、キリスト者のこと、教会のことです。彼らは既に、神の怒りが現れる前に、怒りから救われるために天に引き上げられています。そして、イエスの証しのために首をはねられた人たちというのは、黙示録 6 章にあるように患難時代に殉教した人々です。それから獣の国が始まり、刻印を押されることを拒んだゆえに殺されていった、患難時代でも後半部分で殉教した人々も、復活します。これでイエスを主とする者たちの復活が完了します。復活するというのは、アダムが罪を犯す前に神から初めに与えられていた使命、つまり地を従わせるということ、支配すること、管理することです。王となること、治めることです。それで、千年間、キリストと共に支配することになります。

1B 取り囲まれる都 7-9

それで 7-8 節をご覧ください。7 しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、8 地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海べの砂のようである。

千年王国の状況は、エデンの園の時代の回復です。創世記 5 章において、アダムからノアに至る系図が書かれています。そこでアダムが 930 年まで生き、その後もかなり長い年月を生きたのですが、「息子、娘たちが生まれた」と書かれています。その長い期間、結婚してからはずっと息子たち、娘たちが生まれています。したがって、100 歳近く生きているおじいさん、おばあさんには曾孫までを見て、かなり大きな家族になりますが、それだけの長寿でしたら、とんでもなく大きな人数になることは目に見えています。それでノアの時代には、大きな人口を地球が抱えていたのです。千年間という期間は、アダムやその子孫でさえ越えることのできなかつた長寿です。千年生きるというところに、象徴的にアダムが罪を犯した後の状態よりも良くなっている、エデンの園の回復がほぼ行われているのだということを示しています。

ですから、そういった人々が悪に傾かないというほうが普通ではないでしょう。ノアの時代にみなが悪に傾きましたが、神はメシヤによる王国時代では、悪魔は鎖につながれています。そして、キリストが王のとして鉄の杖を持っています。ですから、悪魔による惑わしは存在せず、ほぼ完ぺきな環境なので、罪を犯す機会さえなかったと言えます。けれども、それでは神の民になっているかと言えば、そうではありません。そこで、エデンの園にある善悪の知識の木であります。なぜ、そこに神があえて置かれたのか？と言いますと、神の命令を置いたと言い換えたらいでしょう。神に拠り頼むことには、その命じられたことに従うことが必要です。全く自分の心の赴くままに自由にしているのですが、その心が神と一つになっているからこそ、自由にすることができます。その心に、神に従うという、神への従順がなければ、その愛の関係は成り立ちません。それが、神のすばらしさほどではなくとも、すばらしく見えるものであればあるほど、神を愛していることの真価が試されます。いのちの木のそばに、善悪の知識の木があったことも大事です。園の中央にあるのですが、神の園の中心は命です。私たちは神の永遠の命につなげられています。しかし、そこにはい

つも、善悪の知識の木と隣り合わせです。悪魔のように、高ぶる選択肢はいつも目の前にあります。むしろ、主との親しい交わりを知る時は、ダビデがそうであったように、「敵前で、杯があふれる（詩篇 23）」というものがあるでしょう。

ですから、主との親しい関係を持つことによって、私たちは多くのものを任され、多くのものを任されている時は誘惑と隣り合わせになります。けれども、それが愛の結びつきをさらに強くし、それが善悪の知識の木がそこにある理由の一つであったでしょう。したがって今、千年間のキリスト王国において、人々が神を愛して、神を選び取る試しが与えられていると言えます。そこで、神を選ばずに悪魔の惑わしを選んだ者たちが大勢いたということです。

ここに、「地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグ」とあります。ゴグとマゴグについては、エゼキエル書 38 章の預言にあります。ここ、千年間の終わりの時に起こる出来事は、エゼキエル 38 章のそれとは違いますが、そのパターン、起こっていることの流れがエゼキエルの預言と同じだということをここで話しています。というのは、エゼキエルの預言のほうは地の四方ではないからです。かなり広範囲であります。それでもイスラエルには比較的に近い国々から、一斉に攻められる預言であります。その一部を読みましょう。

2 「人の子よ、マゴグの地のゴグ、すなわちメシェクとトバルの総首長に対して顔を向け、彼に預言して、3 言いなさい。主なる神はこう言われる。メシェクとトバルの総首長ゴグよ、わたしはお前に立ち向かう。4 わたしはお前を立ち帰らせ、お前の顎に鉤をかけて、お前とその全軍、馬と騎兵を連れ出す。彼らは皆完全に武装した大集団で、大盾と小盾を持ち、皆剣を持っている。5 ペルシア、クシュ、プトが彼らと共におり、皆、盾を持ち、兜をかぶっている。6 ゴメルとそのすべての軍隊、北の果てのベト・トガルマとそのすべての軍隊、それに多くの国民がお前と共にいる。7 備えをせよ。お前も、お前のもとに召集されるすべての集団も備えをせよ。お前は彼らの監督となれ。8 多くの日の後、お前は呼び出され、また、多くの年を経た後、一つの国を襲う。それは長く荒れ廃れていたイスラエルの山々で、そこには、剣の恐れから解放され、多くの民の中から集められた民がいる。彼らは多くの民の中から連れ出されて、今は皆、安らかに暮らしている。9 お前は嵐のように上って来て、地を覆う雲のように襲いかかる。お前とお前の全軍、お前と共にいる多くの民は。

マゴグというのはロシア南部の黒海とカスピ海の間を中心にする地域一帯です。メシェクとトバルも、ロシアの中にあります。そのゴグをロシアとも訳せ、ロシアであるとする人たちもいます。そして、ペルシヤはイラン、クシュはエチオピアですが、今のスーダンも含まれます。プトは今のリビアです。そして、ゴメル、またベト・トガルマは今のトルコです。彼らがロシアに付いて行って、一丸となって攻めていきます。イスラエルに向かって攻めますが、彼らが安らかにしている時に、一気に攻めて来るのです。これが起こるのは、意見がいろいろありますが、おそらく患難時代の前に起こるかも

しれないと思います。ここで見たように、地の四方から諸国の民が攻めて来るとする千年王国の終わりではないことは明らかです。けれども、一気に不意打ちをするように攻めて来るということについては、同じ型を見ることができます。それで、ここはゴグとマゴグと言っていると思われる。

そして「彼らの数は海べの砂のようである。」とありますが、先ほど説明したとおりです、この時には、神とキリストを主とするという決断を本当の意味でしていない人々が大多数になっているということです。

9 彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。

「地上の広い平地に上って来」ということですが、終わりの日の神の都、エルサレムは、イエス様が再臨された時に、そこだけが高くなり、周りは低い平地とさせらるることがゼカリヤ書に書かれています。「14:10 全土はゲバからエルサレムの南リモンまで、アラバのように変わる。エルサレムは高められ、もとの所にあつて、ベニヤミンの門から第一の門まで、隅の門まで、またハナヌエルのやぐらから王の酒ぶねのところまで、そのまま残る。」アラバとは、ヨルダン溪谷の一事帯のことですが、海水面よりも低い地域です。とても低くなり、平地になります。けれども、エルサレムは高められます。イザヤ書やミカ書には、その高められたシオンの姿が描かれています。「4:1-2 終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家の上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。」

そして「聖徒たちの陣営」という言葉が興味深いです。陣営と言っても、武器を持っているわけではありません。かつてのイスラエルの民が荒野で宿営している時に、バラムが呪おうとしてもそれを神が祝福に変えられたように、霊的な防衛を聖徒たちは持っています。エルサレムは、主ご自身が炎の城壁を置いてくださる町となります。「2:4-5 エルサレムは、その中の多くの人と家畜のため、城壁のない町とされよう。しかし、わたしが、それを取り巻く火の城壁となる。主の御告げ。主のわたしがその中の栄光となる。」すばらしいですね、主は、私たち聖徒のために御使いも遣わしてくださり、主ご自身が戦い、守ってくださいます。そして「愛された都」です。これもまた、ゼカリヤ書に色濃く、その神の御思いが書かれていました。「1:14-15 わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。しかし、安逸をむさぼっている諸国の民に対しては大いに怒る。わたしが少ししか怒らないでいると、彼らはほしいままに悪事を行なった。」主は、エルサレムを妬むほど愛され、それゆえエルサレムに触れるものがあるならば、火をもって裁かれるのです。

ですからここで、「天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。」とあります。聖徒たちが戦った

のではなく、主ご自身がご自分の聖い火によって彼らを滅ぼされます。ところで興味深いのは、天から火が降って来たということは、主の御座のある天がまだ上にあるということです。21 章以降、その天が地上に降りて来る、天のエルサレムの姿を見ます。そこには主の御座が、新しい都の中にある状態、天と地が一つにされた状態を見ます。

2B 地獄に墮ちる悪魔 10

10 そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

ついに、悪魔が「火と硫黄との池に投げ込まれた」とあります。実は、彼がいるべきところとして神が造られたのが地獄です。マタイ 26 章 41 節に、「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」とあります。そして、「そこは獣も、にせ預言者もいる所」とありますが、覚えていませんか、19 章の最後で、ハルマゲドンの戦いに敗れた獣と、獣を代表する偽預言者がまず、生きのまま火と硫黄の燃える池に投げ込まれました。そして、「いる」と言っていますから、千年が経った今もいるということです。それで、「永遠に昼も夜も苦しみを受ける」と言っています。永遠にその苦しみは続くのです。しかも、昼も夜もと強調しているので、絶えずということです。休息はありません。

悪魔については、「上から下に落ちる」という経路をたどっています。まず、主ご自身の御座のそばにいた御使いです。そこから墮落して、空中へと墮ちました。それで、空中に権威を持つ支配者とエペソ書などでは呼ばれています。そして黙示録 12 章では、天で戦いが起こって、サタンとその手下の使いが地上に投げ落とされたとあります。それによってできるのが獣の国です。そして、ハルマゲドンの戦いの後、サタンは底知れぬ所に墮ちます。そしてついに地獄、ゲヘナに墮ちます。ところで、次にハデスが出てきます。ゲヘナとハデスは違うところなので、それを 11 節以降で説明します。

2A 大きな御座 11-15

1B 行ないの書 11-13

11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。

ついに、最後の審判です。「大きな白い御座」とありますが、偉大な、力ある、畏れ多いということです。それが「白い」とあります。これは、光り輝く方であられ、あまりにもその光が強いのので、白くなっている状態です。「近づくこともできない光の中に住まわれ」とあります(1テモテ 6:16)。そして「御座」であります。これは単数形です。興味深いことに、黙示録 22 章 1 節には、「神と小羊との御座」とありますが、その御座も単数形なのです。つまり、父なる神とキリストは一体、御父と

御子がおひとりなのだということがここからも分かります。

聖書は、何度も何度も、私たちが神の御前に出て、申し開きをすることを教えています。「ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」「神は、ひとりひとりに、その人の行ないにしたがって報いをお与えになります。(ローマ 2:6)」そして、「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるものです。(2:16)」私たちがしていること、行なっていることの全てが、神の御前に持って行かれるのだということでもあります。

そして、この時に今の天地が無くなります。「地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。」と言っていますね。千年期における天地は、改まったものであって、刷新されたものです。「使徒 3:21 このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。」万物の改まる時ということです。それで先ほど、エデンの園のような状態に回復したとお話しました。けれども、改まったけれども、古い天と地の秩序でありました。ところが主は、それらをも全く新しくされます。

次回の 21 章で新しい天、新しい地について見ていきますが、ペテロがこの全く新しくされる神の働きを、預言しています。「2ペテロ 3:10-13 しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならぬことでしょうか。そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」天の万象が崩れます。イエス様も、天と地は過ぎ去るけれども、わたしのことばは決して過ぎ去らないと言われました。ヘブル書においても、ハガイの預言を取り上げてこう話しています。「ヘブル 12:26-27 あのときは、その声が地を揺り動かしましたが、このたびは約束をもって、こう言われます。「わたしは、もう一度、地だけではなく、天も揺り動かす。」この「もう一度」ということばは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。」聖書ははっきりと、今のものは過ぎ去り、けれども決して揺り動かされることのない御国が与えられることを教えています。そこにキリスト者の期待がかかっているといえなければいけません。

12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行ないに応じてさばかれ

た。

ここで「第二の復活」が書かれています。「死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っている」と言っていますね。私たちはすでに、「第一の復活」についてみました。5-6 節にあります、「5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。」幸いな者、聖なる者と呼ばれていますね。第一の復活は幸いですが、第二の復活は災いです。なぜなら、神の法廷に出るための復活であり、判決を受け、そして刑罰として火の池に投げ込まれるための復活だからです。このことも、聖書に明らかにされている真理であり、ダニエル書 12 章にありますし、イエス様はダニエルの預言から、こう言われました。「ヨハネ 5:29 善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」ですから、甦ると言っても、それが全て良いわけではないのです。永遠のいのちを受ける、報い、称賛を受けるという甦りもあれば、裁きを受けるための甦りもあります。

そして、「大きい者も、小さい者も御座の前に立っている」と言っていますが、これは立場によって裁きが変わるわけではないということです。神はえこひいきしない方です。全ての人が、どんな影響力があろうとも、主の前に出てこないといけないということです。

次に、「数々の書物が開かれた」とあります。主は、すべてのことを記録しておられる、すべてを覚えておられるということです。ダビデはこう言いました。「詩篇 139:16 あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。」このように、たくさんのことを神は書物に書き記しておられます。そして、「139:17-18 神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。」と言っています。それが、数々の書物、という言葉に表れているのでしょうか。

そして、「別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。」とあります。そうです、自分のしてきたこと、その行ないについての書物は数々あるけれども、その原則とは異なる「いのちの書物」というものがあります。神の命にあずかっているかどうか、永遠のいのちを持っているかどうかの書物です。自分の名が、そこに記録されていれば永遠のいのちにあずかり、そうでなければ、他の書物にしたがって行ないに応じて裁かれます。モーセは、イスラエルが金の子牛を拝んで罪を犯したとき、こうして主に執り成しを行ないました。「しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。（出エジプト 32:32）」これは、いのちの書物のことですね。イエス様が、悪霊を追い出して戻って来た弟子たちに対してもお語りになりました。「ルカ 10:20 だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

そして、黙示録には「いのちの書」が何度となく出てきました。「わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。(3:5)」イエス様がここで言われているように、いのちの書の基準はイエス様が、父なる神と御使いの前でその人の名を言い表してくださるのかどうか、というものです。マタイによる福音書には、父の前で言い表すとあり、ルカによる福音書には御使いたちの前で言い表すとあり、ここ黙示録 3 章 5 節は、どちらも書いてあります。どちらも、イエス様を自分は知っているという条件なのです。つまり、これは行ないの原理ではなく、知っているといういのちの原則なのです。イエス様が父なる神に、「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。(ヨハネ 17:3)」ということなのです。そしてもちろん、その知るということは、御子を信じる信仰によって可能です。御子に信頼を寄せなくて、どうやってその相手を知ることができるでしょうか？

けれども、「死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行ないに応じてさばかれた。」と言っています。千年間、復活せずにいた死んだ人々は、実はすべて、いのちの書に書き記されておらず、他の書物によって、その行ないに応じてさばかれているのです。それは不当だ、なぜただ信じるだけで、行ないが伴わないのに救われるのか？ 良い行ないもしたのに、どうして裁かれるのか？ という意見を持っている人もいます。これは、恵みの原理があるからです。つまり、すべての人が行ないに応じて裁かれるのです。いや、既に裁かれたのです。ところが、御子が罪のための供え物となってくださり、身代わりに私たちの罪、咎を受けてくださった、そしてこの方に救っていただけるよう、その御名を呼び求めた、ということでもあります。キリスト者も、裁かれました。キリストにあって裁かれました。キリストが身代わりに受けくださった裁きによって、すでにその御怒りはキリストにあって満たされたのです。だから、今、神の和解があります。それを受け取っているのか、受け取っていないのか、ということでもあります。

そのことを、ヘブル書の著者も述べています。究極の裁きとは何か？ ということです。「10:29-31 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。私たちは、「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする。」、また、「主がその民をさばかれる。」と言われる方を知っています。生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」御子を踏みつけていること、契約の血、すなわち新しい契約の血であり、キリストが流された血です。そして恵みの御霊であります。すべての罪を、キリストの血潮で洗い清め、赦してくださり、拭い去ってくださるという血潮です。これを、軽んじる、侮る時に、神の怒りが留まるということです。

13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。

「海はその中にいる死者」と、死者が海の中のように書かれています。そして、それが「ハデス」とも言い換えられています。聖書において、死者が降る所として旧約聖書では「陰府」と書かれています。また、地の中にあるともされています。民数記において、コラたちが陰府に下ったことが書かれています(民数 16:30)が、それは生きている時に地が割れて、地の中に落ちていったことを表しています。エゼキエル書には、エジプトなどが地の下に降りていく幻が書かれています。そして、ヨナ書においては海底の下にあるところとして書いています(ヨナ 2:2)。そして、ミカ書には罪を投げ入れるところとして、海を挙げています。「7:19 もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ入れてください。」そしてイエス様が、小さき者をつまみかせるなら、海の深みに投げ入れられたほうがましであるということをお話しました(マタイ 18:6)。このように、地の中、あるいは海底やその下に、罪が投げ入れられ、また死者が降るよう書かれています。

しかし、神の約束に期待している人と、そうでない人の間には、そうした陰府においても異なる場所に入れられていることを、イエス様はラザロと金持ちの話でしておられます。ルカ 16 章 19 節以降ですね、アブラハムのふところと呼ばれる所にラザロは降りて行き、金持ちは、熱くて苦しい苦しみの場所に入れられています。そして、その間には大きな淵があり、行き来できないとアブラハムが言っています(26 節)。そして、そのアブラハムに対する約束、キリストについての約束を信じていた聖徒たちは、イエス様が復活され、天に昇られる時に自分たちも引き連れて行かれることが、エペソ 4 章に書かれているのです。(あるいは、千年王国の始まりの時に甦るといふ、解釈もあります。)ですから、そこにいる人々はすべて、不信者ということになります。ゆえに海というのが、死とハデスを葬っているようなところであると言えるのです。

2B 第二の死 14-15

13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。

出す、という言い方をしていますが、つまりは甦ったということです。そこにずっと、居留まるようにはしないという意味合いがあるでしょう。ちょうど拘留所にいたけれども、裁判所に連れて行かれるようなものです。だから、行きたくないと思っても出廷しなければいけないということです。そして、何度も何度も、「おのおの自分の行ないに応じてさばかれた」とあります。主は公正な方です。どんな人も、隠れて行なっていることも全て明るみに出します。だれのせいにもできないのです。各々、と強調されています。それぞれが、各々行なったことにしたがって裁かれます。父の罪が子に帰せられることはないし、子の罪が父に帰せられることはありません。

14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

「死とハデス」ごと、火の池に投げ込まれます。ですから、21 章において、新しい天と新しい地には死そのものがなくなることが書かれています。コリント第一 15 章に、キリストが甦られてから最後の死が滅ぼされる時までのことを、詳細に説明している箇所があります。

23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。26 最後の敵である死も滅ぼされます。27 「彼は万物をその足の下に従わせた。」からです。ところで、万物が従わされた、と言うとき、万物を従わせたその方がそれに含まれていないことは明らかです。28 しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

死が最後の敵であると言っています。このようにしてイエス様が万物をご自分の足の下に置かれて、千年期、統治したことを書いています。そして最後の審判において、父なる神に万物を従わせた、お任せになられたと言ったらよいでしょう。

それから、「火の池に投げ込まれた。これが第二の死」と書かれています。第一の死とは、肉体の死です。けれども、第二もあるのだということを強調しています。それは神の住まわれる都から外されている苦しみ場所です。21 章にも出てきます。死というのは、肉体の死もあり、また霊的な死もありますが、ここでは永遠の死と呼んだらよいでしょう、主の住まわれるところから永遠に離れたところに住むという苦しみ場所です。第一だけでなく、第二があるのだということを知り必要があり、そして神は、キリストにあって、第二の死にあずからなくてもよいのだという救いも与えておられます。第二の死からの救いも、神の救いには含まれているのです。

15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

「火の池」は、先に話しましたように、悪魔とその手下のために造られたところですが。けれども、神を意図的に拒み、神は要らないという意思を持っているのであれば、それにふさわしい、その自由意志を尊重するようなところにその人を送らなければ、神のご性質に反します。神は、無理やり、強いて人を天に入れることはできないからです。自ら福音の真理を拒んだ人に対して、神は真理ではなく、悪魔の偽りを聞き、それに従うままにされるのです。「2テサロニケ 2:9-12 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」

そして基準は再び、「いのちの書に名のしるされていない」ということでもあります。自分の犯した罪について、その罪を神のところに持って行っていないということです。

ここから私たちは何を学び取らなければいけないでしょうか？永遠のいのちを持つこと、また永遠の死から救われることが最優先事項だということです。イエスがゲヘナについてお語りになった一つを紹介したいと思います。マタイ 5 章 28 節からです。「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。もし、右の目が、あなたをつまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。(28-30 節)」情欲を抱いて、全身地獄に投げ込まれるぐらいなら、つまずかせている目をえぐりだしなさい。右手を切り取ってしまいなさい、と言われていました。これはもちろん、完全に情欲を抱かなければ地獄に投げ込まれる、ということではありません。罪の生活を続けるよりも、イエス・キリストを救い主として受け入れるかという優先順位の話です。それだけ重要なことだよ、と聖書は何度も何度も、救いの必要性を説いています。